黄帝内経要覧

鄭洪新　李敬林
金明秀　田中ひまり　編著

遼寧大学出版社

黄帝内経要覧

編著者
鄭　洪　新
李　敬　林
金　明　秀
田中ひまり

遼寧大学出版社
1994年・中国瀋陽

(遼)新登字第9号

黄帝内経要覧

鄭 洪 新　李 敬 林
金 明 秀　田中ひまり　編著

遼寧大学出版社出版発行(瀋陽市崇山中路66号)
東北微電子研究所組版中心組版(瀋陽市北陵大街20号)
朝陽新華印刷廠印刷

1994年5月第1版　1994年5月第1刷
字数:268千　印数:1—2000

責任編輯:馬　静　責任校正:関勝林
封面設計:劉桂湘　辛玉英

ISBN 7-5610-2568-8
R・42　定価:18.00

序

「黄帝内経」は「素問」と「霊枢経」との二部作から並びに称されてきた著作であり、我が国の現存する最古のもので、また系統的、完備された医学経典でもある。この書物は我が国の古代の医学成果をまとめ、中医薬の理論システムを創立し、中医学の基礎をうちたて、そしてずっと中医学術の発展を指導してきている。ですから、中医学が伝統的な民族特色に富むばかりでなく、現世界での医学科学システムに向かうことができる。

どのような学問分野の発展でもみな哲学をはなれることなく、必ず一定の認識方法を取られるわけである。「黄帝内経」は漢以前の重要な哲学研究成果を取り込んで、その時代哲学理論と医学理論がとけあい、一つの切っても切れない整体となる。それは人体の生命活動の規律を探究すると同時に中国哲学史の上での多くの重大なテーマ、例えば「道」、「気」、「陰陽五行」、「形神関係」、「天人関係」などに対しても徹底した独特な論述が行なわれた。哲学は医学を指導し、医学は哲学を豊富にして発展させてきた。したがって、「黄帝内経」は中国古代哲学を研究する貴重な資料でもある。中医学を学ぶならば、必ず哲学、特に中国古代哲学を身につけなければならない。哲学を身につけることこそ、真に中医学の本質や特徴を理解することができる。

「黄帝内経」は綜合的に人体に関する各学問の知識を運用して、その生理、病理、診断、治療、予防、養生などの理論の中に古代の天文、暦算、地理、気象、生物、物理及び心理などの学問分野の

知識がしみこんでいるので、「黄帝内経」は医学を主体とする科学論文集だと言える。生命科学に関する科学知識を身につけ、中医学の勉強に対して、有益的なことのみだけでなく、かつ必要なことだと思う。

群書を博覧することあらず、医術を精通することあたわず、広くつみとってあくまで追究することあらず、手をつけて春をなすことあたわず。「黄帝内経」は群書の冠にあり、内容がゆたかで、示教が著明して、中医学を学ぶ者のための必読する書物であるが、その字句の内容が奥深く、趣意が難しく分かりにくいし、たとえ漢学についての深い基礎があったとしても、「黄帝内経」を手にした時、その難解さに困惑することもある。そのうえ、日本語でその意義を詳しく明らかにすることはとても難しい事である。

鄭洪新らは日本語で「黄帝内経」に多くの篇章の内容の要旨をまとめ、養生から始まり最後は治則まで、その類別にしたがって編集している。また「訓読」、「注釈」、「要点」などの項目を立てて、理論を申し述べ、趣意を解明し、要領が確実で、言語も要所をつかんでおり、そして真の趣旨を明らかにし、読者に啓発をし、一層中医の学術を広げ、中医学の対外交流を推し動すことに対し、極めて意義深い幸事に違いがない。楽しんでその書物を見、喜んでその序を為す。

李徳新

中国・瀋陽
遼寧中医学院にて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

「黄帝内経」は「医家の宗」と呼ばれ、中医研究者や学者・医師・針灸家の必読の書物と言われておりながら、経典著作を学ぶ場合、その原書を直接読むほうがいいが、現代人にとって古文は読みづらく、とても理解しにくい。その上、「黄帝内経」の文字が十数万ほどもあり、あまり読まれないからでしょう。なるべくこれを解決しようとする目的を達するため、また臨床・研究・教育に役立つものが欲しがったので、本書の企画をする事にいたしました。

本書は「黄帝内経」の原書から、臨床・研究・教育によく使われて役立つ粋を精選して養生、陰陽五行、蔵象、経絡、病因病機、病証、診断、治則などの類を内訳し、さらに明確な各項目を立てて、下に【原文】、【訓読】、【注釈】、【要点】を書かれたものである。その原文は「黄帝内経素問」、「霊枢経」(中国・人民衛生出版社　1963年)より抜き出して、その訓読は「黄帝内経素問」、「黄帝内経霊枢」(柴崎保三著　日本・雄渾社　1979年)より引用しているが原文に対する理解が異なった場合、書きなおしをしたこともあり、また「内経講義」(中国・上海科学技術出版社 1984年)を主な参考書としている。

本書の編集により、「黄帝内経」の精華を汲み、十分に活用され、よく役に立てて、一層中医学の対外交流を広げようと、われわれは期待している。

原稿を終えるにあたりまして、全国中医基礎理論専業委員会主席李徳新教授よりご教益を賜り、そしてみずから序文をいただき、また 全国内経専業委員会趙明山教授及び馮景双先生がご指導をいただきました事に対しまして、ここに深甚なる謝意を捧げます。

編著者

目　次

第一章　緒論……（1）

第二章　養生……（4）
一、養生の道 ……（4）
（一）養生についての基本的原則……（4）
（二）腎気——人間の生、長、壮、老の根 ……（6）
二、「未病を治す」における理論 ……（9）

第三章　陰陽五行 ……（11）
陰陽学説
一、陰陽の基本概念……（11）
二、陰陽学説の主な内容……（13）
（一）陰陽の対立、統一、消長、転化、昇降 ……（13）
（二）陰陽の相対性と可分性 ……（16）
三、陰陽学説の意義……（17）
四、陰陽学説の中医学における応用……（18）
（一）人体の形態結構の陰陽属性 ……（18）
（二）人体の生理活動の陰陽平衡 ……（20）
（三）人体の病理変化の陰陽失調 ……（22）
（四）診断方法の陰陽法則 ……（25）
（五）治療原則の陰陽協調 ……（27）
五行学説
一、五行学説の基本概念と基本内容……（33）
二、五行学説の中医学における応用……（37）

(一)「四時五臓陰陽」の整体観 …… (37)
(二)四時に多く発生する疾病 …… (41)
(三)五臓を傷める所は五味にあり …… (43)

第四章　蔵象 …… (45)
臓腑
一、臓腑の分類法 …… (45)
二、臓腑の生理機能…… (48)
三、脾胃について…… (51)
(一)脾と胃との相互表裏 …… (51)
(二)脾病による四肢不用 …… (54)
(三)脾と季節とのかかわり …… (55)
(四)脾は胃のためにその津液を行る …… (56)
四、臓腑の相互表裏…… (58)
五、五臓とその七竅…… (60)
六、五臓と目の生理…… (62)
七、五臓の機能による営養代謝…… (64)
八、五臓の機能による水液代謝…… (65)
九、人体の四海について…… (67)
(一)四海の名称と経水 …… (67)
(二)四海の位置及び所属する俞穴 …… (68)
(三)四海における有余と不足の症状 …… (69)
(四)四海の病に対する治療原則 …… (71)
精気神
一、六気の生成、作用及びその病変 …… (72)
(一)六気の生成、作用…… (72)
(二)六気不足の病証 …… (74)
(三)六気と五臓 …… (76)
二、営衛の気について…… (77)

(一)営衛の生成、循環、会合 …… (77)
(二)営衛血気と睡眠 …… (81)
(三)営衛と三焦 …… (83)
三、宗気の機能と営衛の気…… (88)
四、精神魂魄について…… (90)
(一)人間の精神思維活動 …… (90)
(二)精神活動の異常による病証 …… (94)
(三)五臓神 …… (96)
五、臓腑、経脈、気血、営衛の生理機能について …… (98)

第五章　経絡…… (101)
一、経絡の作用 …… (101)
二、十二経絡 …… (102)
(一)手の太陰肺経…… (102)
(二)手の陽明大腸経…… (105)
(三)足の陽明胃経…… (108)
(四)足の太陰脾経…… (112)
(五)手の少陰心経…… (115)
(六)手の太陽小腸経…… (117)
(七)足の太陽膀胱経…… (119)
(八)足の少陰腎経…… (121)
(九)手の厥陰心包経…… (124)
(十)手の少陽三焦経…… (127)
(十一)足の少陽胆経…… (129)
(十二)足の厥陰肝経…… (132)
三、十五別絡 …… (135)
(一)手の太陰の別絡—列缺…… (135)
(二)手の少陰の別絡—通里…… (136)
(三)手の厥陰の別絡—内関…… (136)

(四)手の太陽の別絡—支正…… (137)
(五)手の陽明の別絡—偏歴…… (138)
(六)手の少陽の別絡—外関…… (139)
(七)足の太陽の別絡—飛揚…… (139)
(八)足の少陽の別絡—光明…… (140)
(九)足の陽明の別絡—豊隆…… (140)
(十)足の太陰の別絡—公孫…… (141)
(十一)足の少陰の別絡—大鍾…… (142)
(十二)足の厥陰の別絡—蠡溝…… (143)
(十三)任脈の別絡—尾翳…… (143)
(十四)督脈の別絡—長強…… (144)
(十五)脾の大絡—大包…… (145)

第六章　病因病機…… (146)
一、陰陽(内外)二因論 …… (147)
(一)陰陽二因論と三部の気…… (147)
(二)正気は健康の本なり…… (148)
二、内因について …… (149)
(一)五臓を傷める内因…… (149)
(二)九気による疾病…… (150)
三、外邪の病因について …… (153)
四、病機十九条 …… (155)
五、陽気失常のいろいろ …… (163)
(一)生の本は陰陽に本づく…… (163)
(二)陽気の重要性及びその作用…… (165)
(三)陽気失常…… (166)
(四)陽気を保つ要領…… (175)
六、陽気盛衰と疾病変化との規律 …… (176)

第七章　病証……（180）
一、熱病 ……（180）
（一）傷寒の概念、病因病機及び予後 ……（180）
（二）傷寒における六経主証及び順伝規律……（182）
（三）六経病の回復……（184）
（四）六経病に対する治療大法及び熱病禁忌……（185）
（五）傷寒における両感の主証及び逆伝規律……（187）
（六）暑病と温病との鑑別……（189）
二、陰陽交、風厥、労風 ……（190）
（一）陰陽交……（190）
（二）風厥……（192）
（三）労風……（194）
三、熱病の五つの逆証 ……（196）
四、咳嗽 ……（197）
（一）咳嗽の病因病機……（197）
（二）五臓咳の症状……（199）
（三）六臓咳の症状……（201）
（四）咳嗽に対する治療原則……（203）
五、痛証 ……（203）
（一）痛証の主な病因病機……（203）
（二）十四種類の痛証……（204）
（三）痛証の診断方法……（208）
六、風証 ……（209）
（一）風邪の性質及び腠理、経脈にある病気 ……（209）
（二）臓腑の風及びその他……（212）
（三）五臓風の症状……（215）
（四）首風、漏風、泄風の病状……（217）
七、痺証 ……（219）
（一）痺証の概念、病因（外因）及びその種類 ……（219）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(二)五臓痺の形成……(220)
(三)臓腑痺の症状……(222)
(四)臓腑痺をもたらす内在的な原因……(223)
(五)痺証の予後及びその治療……(226)
(六)痺証と体質及び五体痺の病状……(228)
八、痿証 ……(230)
(一)痿証の概念、命名、症状及び病理機序……(230)
(二)痿証の病因及びその形成……(232)
(三)五臓熱による痿証の鑑別……(236)
(四)痿証に対する治療原則……(237)
九、厥証 ……(239)
(一)寒厥、熱厥の症状、病機……(239)
(二)寒厥、熱厥の病因 ……(241)
(三)昏厥……(244)
(四)六経の厥……(245)
十、積聚 ……(247)
十一、腫脹 ……(249)
(一)水腫、膚脹、鼓脹……(249)
(二)腸覃、石瘕 ……(251)
(三)膚脹、鼓脹の針刺原則 ……(254)
(四)風水(腎風)……(254)
(五)水腫の病理機序及び治療原則……(257)
十二、瘅 ……(259)
十三、癲狂 ……(260)
(一)癲疾……(260)
(二)骨癲疾、筋癲疾、脈癲疾……(263)
(三)狂病……(265)
(四)癲疾の先天的な原因……(268)
十四、癰疽 ……(269)

(一)癰疽の病因病機及びその伝変……(269)
(二)癰疽の鑑別……(270)

第八章　診法……(272)
一、望診 ……(272)
(一)顔面部においての望診要領……(272)
(二)顔面部の望診個所と対応する臓腑肢体……(275)
(三)色診の要領……(277)
(四)善色と悪色及び目の望診……(279)
(五)形態の望診……(281)
二、聞診と問診 ……(283)
三、切診(脈診と触診) ……(285)
(一)脈診は「独り寸口を取る」といった原理……(285)
(二)脈診は常に平旦を以てす……(287)
(三)脈象と臨床意義……(288)
(四)脈は四時に応じる……(290)
(五)胃気の有無による四時五臓平、病、死脈……(292)
(六)真蔵脈(死脈、無胃気脈) ……(296)
(七)呼吸定息による平、病、死脈……(296)
(八)虚里診と尺膚診……(298)

第九章　治則治法……(302)
一、正治法 ……(302)
二、反治法 ……(307)
三、調和陰陽 ……(309)
四、標本緩急 ……(311)
五、制方法則 ……(314)
(一)処方にある薬物の役目……(314)
(二)処方分類、反佐方法 ……(315)

第一章　緒　論

「黄帝内経」というのは中国での現存する最も古い医学書籍である。この書は系統的に古代医学の成果と治療経験を集め、素朴な唯物論と弁証法を運用して、人体の解剖、生理、病理及び疾病の診断、予防、治療などの各方面にわたって、より全面的に論述し、中医学の理論基礎をうちたてたものである。

其の理論の基礎は実践にあり、これがまた逆に臨床実践を指導しながら、絶えず充実し発展していくのである。幾千年も前から、悠久なる歴史を有する我が中華民族の発展と人民の保健のために中医学は大きな貢献を捧げたことは誰しも否むことは出来ない。このことは「黄帝内経」の理論体系の正確さと切っても切れない深い関わりがある。したがって歴代医家は皆「黄帝内経」を中医学の古典とし、針灸医学の基本的典籍としても重視され、針灸医学の勉強には欠くべからざるものといわれている。

「黄帝内経」は「素問」と「霊枢」から成っている二部作というべき医書である。「黄帝内経」という書は「漢書・芸文志」にもっとも早期に見られる。この「方技略・医経家」に「黄帝内経」18巻、「黄帝外経」37巻の書名が載せられている。「内経」という書に対して別に「外経」という書があったことがこれでわかるはずである。中世までの中国思想の特徴の一つは古を尊ぶ気風であった。したがってこの医書を編集したり、又は授けられたりした人たちは黄帝の作った書として殊更に仮託したわけである。

「素問」の素とは太素(物質の始り)または本(根本)を意味す

ると思われるが、問とは黄帝とその大医であった岐伯らとの問答のことで、とにかく物質の根元と医学上の諸問題を論じた本である。つまり、自然と人生との関係、疾病発生の根本原理を説明することと解くべきである。又霊枢は「神霊の枢要」という意味で其の内容は経絡と針灸について論じたもので、それで「針経」という名でよばれることもある。

「素問」という書名は後漢の張仲景著「傷寒論」の序文に初めて現われた。「勤めて古訓を求め、博く衆方を採り、素問、九巻、八十一難、陰陽大論、胎臚薬録並びに平脈弁証を用い、傷寒卒病論16巻からなる」とある一節で、「九巻」は「針経」であり、後に「霊枢」と呼ばれた書である。王叔和著「脈経」にも同様の記述があり、医学書としてこのころから定評があったことがわかる。

「内経」の著作年代は果していつごろであるか、これについては古来から、いろいろな議論がある。概していえば、「素問」の著作年代については最も早期の年代は紀元前4世紀ごろで、最も末期の年代は紀元2世紀ごろだろうと推定される。もちろん、これは一人の著作ではなく、戦国時代からはじまり、前漢と後漢までの多数の医学者の集大成だと考えられている。霊枢もほぼ同じであるがもっとも早期の年代は紀元前3世紀ごろで、もっとも末期の年代は紀元1世紀だろうといわれている。

ところが、今日われわれが見られる「素問」はまず唐代王氷が編集し、注解した後、さらに宋の仁宗の嘉祐2年(1057)に高保衡、林億らが校正したものである。「霊枢」のほうは、宋の哲宗の元祐8年(1093)に、史崧が整理したものでする。

「素問」の内容は79篇と遺失した2篇を合わせて81篇となる。「霊枢」も81篇から成っている。

この二部の著作は実際には一人の作者によって著述されたものではないので、原文のまま読んでいては論述の要旨がつかみ

にくい。そこで三国時代の皇甫謐は「甲乙経」を著して「素問」と「針経」と「明堂孔穴針灸治要」との三部の著作にまとめて、針灸治療の教科書とした。

隋の楊上善は、また「素問」と「霊枢」とを一緒にしてこれを「黄帝内経太素」として内訳に入れ、更に注解を加えた。それから元代の滑寿は「読素問鈔」を著した。だが、これも不充分というわけで、明の張景岳は「類経」を著して「素問」と「霊枢」の文章を472条に分け、これを12種類に、まとめ上げた。最後の一種類は「会通類」と名づけて前の11種類に分けられないもの、或は重復するものをまとめたものであるから、実際は11の分類といっても差使えがない。

張景岳の11分類によると次の諸項目がある。(1)摂生(養生又は個人衛生)、(2)陰陽(陰陽についての理論、認識論)、(3)蔵象(五臓についての考え方、生理論)、(4)脈色(診断学)、(5)経絡(経絡の作用など)、(6)標本(疾病の主な症候と副次的な症状、病理論)、(7)気味(五味と養生と疾病との関係)、(8)論治(治療の原則、心得)、(9)疾病(疾病各論)、(10)針刺(ハリの療法、療術)、(11)運気(五運六気説の理論、気象と人体との関係)。

其の後、明の李中梓は「素問」、「霊枢」の内容を選んでその中の主な内容について分類しながら注解を加え、故に書名は「内経知要」という。「内経知要」では8種類に分け、つまり道生(養生)、陰陽、色診、脈診、蔵象、経絡、治則、病態という分類方法である。

以上の医家の分類、注解の方法は実は「内経」の理論体系についての帰納である。其の分類についてはいろいろな異った見解があるが一般的に言えば針刺、俞穴などの内容を除いて、先ずは養生、陰陽、五行、蔵象、経絡、病因病機、病証、診法、治則などにわけられている。

第二章　養　生

養生とは、即ち生命を保養する意味である。養生学説は身体の健康を維持し、長生きを保たせる理論、原則及び方法について研究するものである。

「内経」の養生学説は以下のような特徴をもっている。

(一)自然界に応じることは、養生の重要な原則である。

(二)精神情志の調和を養生の重要な措施としている。

(三)正気を保養するという養生の主導作用が重視されている。各種の養生方法としては皆正気を保たれたり、強められたりすることが強調されている。

一、養生の道

(一)養生についての基本的原則

【原文】

夫上古聖人①之教下也，皆謂之虚邪賊風②，避之有時，恬淡虚無③，真氣從之，精神内守，病安從來。是以志閑而少欲，心安而不懼，形勞而不倦，氣從以順，各從其欲，皆得所願。故美其食，任其服，樂其俗，高下不相慕，其民故曰樸④。是以嗜欲不能勞其目，淫邪不能惑其心，愚智賢不肖⑤，不懼於物，故合於道⑥。所以能年皆度百歳，而動作不衰者，以其德全不危⑦也。(「素問・上古天真論篇第一」)

【訓読】

夫れ、上古聖人が下に教ゆるや皆之を謂う虚邪賊風これを避くるに時あれども恬淡虚無なれば真気之に従い、精神内に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com